

## 平成 28 年度以降の運営方針について

### 1. 背景

#### (1) 課題解決に向けた山・川・海部会の活動が活発化

これまで話し合いやフィールドワークを行ってきた山・川・海の各部会とも課題解決に向けた具体的な活動が動き出し、各部会で何を行ってきたのか、その成果が出始めている。

#### (2) 流域連携を話し合う場を新たに立ち上げ

これまで各部会で話し合ってきた、流域連携に関する取組みについて懇談会メンバーの意見を聞きつつ、「ごみ・流木」「土砂」「木づかい」の 3 テーマに絞り、検討を進めていくこととした。

検討にあたっては、テーマごとに主務担当者を選定し、検討方針・進め方について、市民企画会議、市民会議、全体会議を通じて方向性を確認した。

#### (3) 河川整備計画のフォローアップを開始

矢作川流域圏懇談会のもう 1 つの目的である「河川整備に関わる情報共有・意見交換」の取組みを全体会議で行うこととした。

また、全体会議で河川整備計画をフォローアップする前に、勉強会を開催(H26)するといった工夫を行った。

### 2. 懇談会の目標

前期 3 カ年の運営方針を基本的に踏襲したうえで、以下の取組みを補強していくことにより、流域圏全体の発展につなげていくこととしたい。

#### (1) 各部会の活動成果の見える化

平成 28 年度からは、課題解決に向けた実行（実証）を行っていく節目の年である。これを契機に、山・川・海のこれまでの活動成果が見える化することで、各部会が各々何を目指していけばいいのか明らかにしていく。その結果、産学民官が果たすべき役割も見えてくることから、一層の活動進捗・合意形成につながることを期待できる。

表 1 各部会の成果の見える化に向けた取組み内容（案）

部会	成果の見える化に向けた取組み内容(案)
山	①H25～H27 年度の山村再生担い手づくり事例の MAP 化、ホームページへの掲載 ②代表的な森づくりの情報のパンフレット化 ③木づかいガイドラインの作成・公表
川	①川のあるべき姿の共有(まずは国交省所有の河川環境基図を活用した意見集約) ②活動団体へのヒアリング結果のデータベース化(山①との連携) ③活動団体 MAP の作成/専門家リストの充実と更新
海	①ごみ・流木調査の一斉実施とデータベース化、MAP 化 ②生き物モニタリング調査のデータベース化、MAP 化

## (2) 山・川・海メンバーの相互理解の促進

来期は本格的に流域連携の取組みを推進していくことを目標に、ますます、お互いの相互理解を促進していくことが必要である。

そのため、①山村再生担い手づくり事例集(山)と活動団体ヒアリング(川)といった異なる部会WGでの同様の活動は部会連携で実施すること、②各WG活動の他部会への参加を積極的に呼びかける(図2参照)ことを実施していくことが必要である。

山部会資料

部会間で異なる調査項目を統一化し、情報共有をしやすいとする。

川部会資料

- 山：山村再生担い手づくり事例集
- 山：木づかいライブ・スギガラキャラバン
- 川：活動団体ヒアリング
- 海：ゴミ流木調査
- 海：漁業者との交流会
- 海：干潟(試験造成)モニタリング

図2 部会連携に向けた調査項目の統一

図1 相互に参加を行いたいWG活動(案)

## (3) 流域連携テーマ検討の具体化

昨年度、方向性を明らかにした流域連携テーマについては、今後3つの部会共同で、何かをつくり出す仕組みを検討し、具体化していくことが必要である。全国に胸を張れる矢作川流域圏での取組みを共有し、全国にPRしていく形が望まれる。

## (4) 河川整備計画のフォローアップの改善

H26は、整備量(率)から見た達成状況をフォローアップとして実施したが、今後はフォローアップの取組みを通じて流域圏一体化(各組織のネットワーク化)につなげることを目指す。具体的には、今後①～③のフォローアップの実施に向けた取組みを行っていききたい。

- ①整備量(率)からみた達成状況 →アウトプット指標化による効果の把握
- ②流域圏懇談会との関わり →流域圏一体化に向けてどのような活動に活用されたかを定量的に把握  
(ex.現地見学、調査モニタリング、事業への提案など)
- ③整備による効果の発現状況 →流域圏懇談会の活動を通じて得られた整備効果(アウトカム)の把握  
(ex.再生した干潟のモニタリングや樹木伐開のモニタリングなど)

来年度からは①～③までを含む本格的なフォローアップを実施することを目標とする。

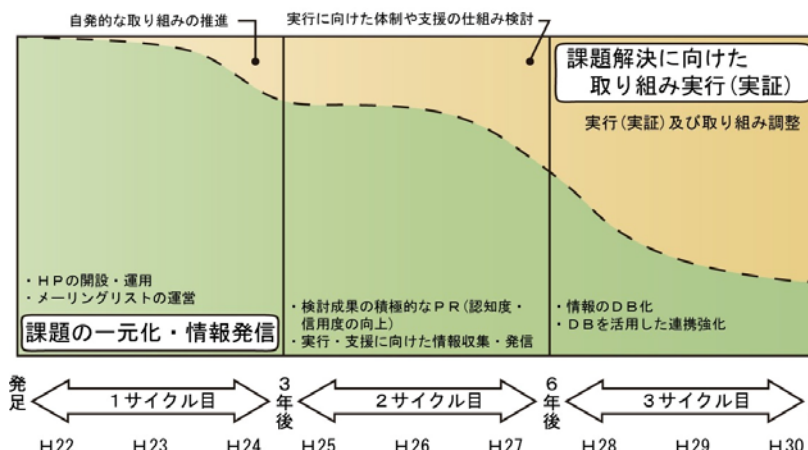


図3 今後のフォローアップのイメージ